

心と対話する建築

—コラージュを用いた設計手法について



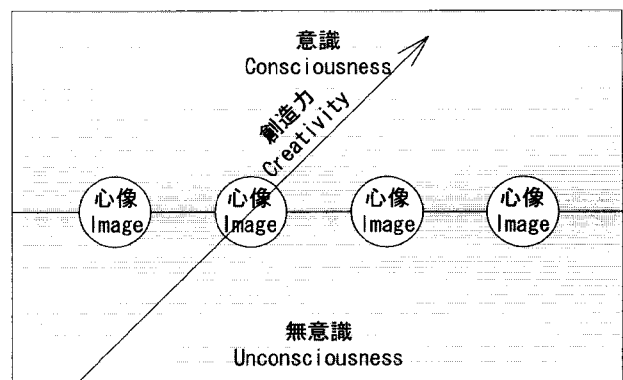
連 健夫

心と対話する建築を目指し、コラージュを用いた設計をしています。コラージュに出会ったのはAAスクールです。学生・教師として5年間過ごした中で、心と創造性について強く考えさせられました。と言いますのは、そこではスキルのみならず、個性と創造性を引き出す建築教育が行なわれていたからです。禅問答にも似た教師と学生の関係が、私には臨床場面での心理士と看者の関係に重なりました。以前から創造性を扱うユング心理学に興味があり、建築設計教育における創造性とユング心理学を研究テーマにしました。その中で、扱ったのがコラージュ（切り貼り絵）です。この学校ではコンセプトの表現にコラージュがよく用いられていました。コラージュは様々なイメージを扱うことができ、言葉では表現できないものを表現できる特徴があります。ユング派において、コラージュ療法は箱庭療法の簡易版として発展してきました。コラージュ作りの中で、心の問題を解きほぐす療法です。ユングは無意識を意識化することを創造性と位置づけ、それを治療に役立てました。無意識と意識との間に存在するのは心像（イメージ）であり、それを扱うことによって無意識とコミュニケーションをとることができると考えました。つまりコラージュに貼られたイメージです。臨床場面では、心理士の態度と応答が重要であり、看者の創造性をうまく引き出し治療します。このメカニズムを手がかりにして、設計教育の創造性を論じたわけです。

これを実施に応用したいとの思いから、帰国後に週末住居の設計で施主にコラージュを作ってもらいました。コラージュは曲面で構成されており、中央に施主が昔住んでいた家の写真が貼られていました。ここから「有機的、緑の雲形、左右対称、自然、横羽目板、水」などのデザインキーワードを抽出し、コンセプトモデルを作り対話を重ね設計しました。完成した建物に施主の愛着感は強く、彼の感想は「新しいのになぜか懐かしく癒される。仕事も元気が出てはかどる」でした。この方法に確かな自信と可能性を感じました。すなわちコラージュを用いた心と対話する建築づくりです。その後、友人の家の設計では、子供でもコラージュを簡単に作ることができるのが分かり、おもちゃライブラリーの設計では館長のコラージュに、理事長が言葉を付加する方法や、ルーテル学院大学新校舎の設計では、コラージュ作りを学生参加の

ワークショップで行ないました。大切な点は、利用者がデザインプロセスに創造的に参加する視点と考えています。これは街づくりにおける市民参加の意味にも共通するもので、ボトムアップ的設計です。設計時の参加のみならず、施工においても、床下の炭敷きや壁塗りなど利用者が参加する機会を作るようにしています。そのことによって建築が、利用者の心に近いものになると考えています。児童養護施設の心理療法棟の設計では、子供たちとコラージュ作りを行なうと共に、施工時に壁に断熱材としての新聞詰めワークショップ、塗装ワークショップなどを実施しました。最初、会話に躊躇していた子供が「塗装のアルバイトできるかしら？」など積極的に話すようになる等、子供たちの成長を促したように感じました。園長の「建物づくりが人づくりになりましたね」の言葉に、この方法の意味を考えさせられました。今後も、心を意識した建築を扱い、手法を深めたいと思っています。詳細は拙著『心と対話する建築・家』（技報堂出版）を参照して頂ければ幸いです。

〈むらじ・たけお／連健夫建築研究室〉



心と創造性のメカニズム



←父性としての大黒柱、母性としての円形による建築空間

↓児童養護施設設計でのコラージュづくり

